

各関係機関長 殿

岡山県病虫害防除所長
(公印省略)

病虫害発生予察情報について

病虫害発生予報第4号を下記のとおり発表したの送付します。

平成24年度病虫害発生予報第4号

平成24年 6 月29日
岡 山 県

予 報 概 評

作物名	病虫害名	発生時期	発生量
水 稻	葉いもち	やや遅	並
	穂いもち	並	並
	紋枯病	並	やや少
	ヒメトビウンカ	—	やや少
	縞葉枯病	—	やや少
	ツマグロヨコバイ	—	並
	ニカメイガ	—	並
	セジロウンカ	—	やや少
	トビイロウンカ	並	並
	斑点米カメムシ類	—	やや多
モ モ	せん孔細菌病	—	やや少
	灰星病	やや遅	やや少
	モモハモグリガ	やや遅	やや多
	ナシヒメシンクイ	—	並
	ハダニ類	—	やや多
ブドウ	晩腐病	—	並
	べと病	遅	やや少
	うどんこ病	やや遅	並
	フタテンヒメヨコバイ	遅	やや少
	チャノコカクモンハマキ	やや遅	並
果樹共通	カメムシ類	—	やや多
キュウリ	べと病	—	少
	うどんこ病	—	やや少
	褐斑病	—	やや少
	炭疽病	やや遅	やや少
キュウリ・ナス	ミナミキイロアザミウマ	—	並
トマト	疫病	—	並
	葉かび病	—	やや少
(アブラナ科野菜) ダイコン	軟腐病	—	やや多
	キスジノミハムシ	—	並
	コナガ	—	少
野菜共通	ハスモンヨトウ	並	やや少
	アブラムシ類	—	並
	モザイク病	—	並
キ ク	白さび病	—	やや少
	ハダニ類	やや遅	やや少
	アブラムシ類	やや遅	並

1. 普通作物

(水 稲)

(1) 葉いもち

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月20～22日の巡回調査によると、本田での発生は確認されていない（発生圃場率の平年値：2.3%、初発生時期の平年値：6月5半旬）。

イ. BLASTAM-メッシュ岡山版（以下、ブラスタム）による葉いもちの感染好適条件は、6月21日及び25日に中部及び南部地帯で広域的に出現した。ブラスタムの最新結果は下表のとおりである。

ウ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並または高く、降水量は平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. 補植用の苗は、伝染源となるので処分する。

イ. 箱処理剤をしていない圃場では、発生を確認後は速やかに防除を行う。箱処理剤を使用している圃場では、箱処理剤と同系統の薬剤の使用を避ける。

ウ. 現時点で未発生圃場でも耐病性の弱い品種（コシヒカリ、あきたこまち、ヒノヒカリ、朝日）は初発後の病勢の進展が速いので、早期発見、早期防除に努める。

エ. 本病は、曇雨天日が多い場合に発病が助長されるので今後の気象に注意する。

表 アメダスデータから推測される葉いもちの感染好適条件の出現状況

(BLASTAMメッシュ岡山版)

地帯区分	北部地帯					中部地帯					南部地帯				
	上長田	千屋	奈義	古町	新見	久世	津山	福渡	和気	高梁	岡山	虫明	倉敷	笠岡	玉野
6. 15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
16	○	○	●	●	○	●	—	●	●	—	—	—	●	●	●
17	○	—	—	—	—	—	—	—	●	—	—	●	—	—	●
18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
19	○	○	—	—	●	●	—	—	—	—	—	—	●	—	—
20	—	○	—	●	—	—	—	●	●	●	—	●	—	—	—
21	—	—	●	●	—	—	●	●	●	●	—	●	●	●	—
22	—	○	●	●	—	●	—	—	—	●	—	●	●	—	—
23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
24	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
25	—	○	●	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
26	○	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

●：感染好適条件 ○：準感染好適条件 —：感染好適条件は現れなかった

(2) 穂いもち（極早生種対象）

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 極早生種の生育はほぼ平年並である。

イ. 6月21～22日の巡回調査では、県北部、中部において葉いもちの発生は認められていない。

ウ. BLASTAM-メッシュ岡山版（以下、ブラスタム）による葉いもちの感染好適条件は、6月21日及び25日に中部及び南部地帯で広域的に出現した。（前述）。

エ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並または高く、降水量は平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. 本病は、曇雨天日が多い場合に発病が助長されるので今後の気象に注意する。

(3) 紋枯病

予報内容

発生時期 並
発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月20～22日の巡回調査では、平年同様発生を認めなかった。

イ. イネの茎数は平年よりやや少ない。

ウ. 前年の発生は平年より少なかったため、越冬菌密度も平年より少ないと考えられる。

エ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並または高く、降水量は平年並とされており、発病をやや助長する条件である。

(4) ヒメトビウンカと縞葉枯病

予報内容

ヒメトビウンカ（第2世代幼虫）
発生量 やや少

縞葉枯病
発生量 やや少

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における第1世代の初飛来は6月15日で平年（6月12日）よりやや遅く、6月1～5半旬の飛来数は5頭で、平年（12.5頭）より少なかった。

イ. 6月20～22日の巡回調査におけるすくい取り調査（20回振り）による発生圃場率は34.5%で平年（47.9%）よりやや低く、1地点あたりの成幼虫発生量は0.9頭で平年（1.7頭）よりやや少なかった。

ウ. 縞葉枯病の媒介虫であるヒメトビウンカの県予察圃場における本年の保毒虫率は0%であり、保毒虫率調査を再開した平成21年～23年の保毒虫率の平均値10.0%より低い。

エ. 近年の県南部における縞葉枯病の発生は、平年並で推移している。

(5) ツマグロヨコバイ

予報内容

ツマグロヨコバイ（第2世代幼虫）
発生量 並

ア. 赤磐市の予察灯における第1世代の初飛来は6月2日で平年（6月6日）よりやや早く、6月1～5半旬の飛来数は123頭で、平年（263.8頭）より少なかった。

イ. 6月20～22日の巡回調査における見取り・払い落とし調査による発生圃場率は9.9%で平年（10.2%）並みであった。

ウ. 6月20～22日の巡回調査におけるすくい取り調査（20回振り）では、成幼虫の発生量は0.3頭で平年（1.1頭）より少なかった。

エ. 6月22日の季節予報によると、7月の気温は平年並か高いとされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

防除上の参考事項

ア. ツマグロヨコバイが媒介する萎縮病は、近年少発生が続いている。

(6) ニカメイガ（第1世代幼虫）

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおいて6月5半旬までに平年同様誘殺を認めていない。

(7) セジロウンカ

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯において6月5半旬まで飛来を認めていない(平年15.9頭)。

イ. 6月20～22日の巡回調査における見取り・払い落とし調査による発生圃場率は1.2%で平年(4.2%)より低かった。

ウ. 6月20～22日の巡回調査におけるすくい取り調査(20回振り)では、1地点あたり成虫発生量は0.03頭で平年(0.6頭)より少なかった。

エ. 6月22日の季節予報によると、7月の気温は平年並か高いとされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(8) トビイロウンカ

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市及び真庭市の予察灯において6月5半旬までに飛来を認めていない。

イ. 6月20～22日の巡回調査において発生を認めていない。

(9) 斑点米カメムシ類(アカスジカスミカメ)

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における6月1～5半旬の誘殺数は82頭で平年(58.0頭)より多かった。

イ. 6月22日の県北部イネ科牧草地のすくい取り調査(20回振り)では、アカスジカスミカメの発生量は1地点当たり5.5頭で平年(23.3頭)より少なかった。

ウ. 6月22日の季節予報によると、7月の気温は平年並か高いとされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

2 果 樹

(モ モ)

(1) せん孔細菌病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月18日の巡回調査によると、発生圃場率は10.8%で平年(20.7%)より少なかった。

イ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年並または高く、降水量は平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. 風雨によって発病が助長されるので、今後の気象に注意する。

(2) 灰星病

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 やや少

予報の根拠

- ア. 県予察圃場における幼果の発病果率は2.0%で、平年(7.2%)より少なかった。
- イ. 6月18日の巡回調査では、一般圃場において果実での発生は認めていない。
- ウ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年並または高く、降水量は平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

(3) モモハモグリガ(第3世代幼虫)

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 やや多

予報の根拠

- ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける第2世代成虫の初飛来は6月14日であり、発生時期は平年(6月10日)よりやや遅かった。
- イ. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺数は110頭で、平年(72.4頭)よりやや多かった。
- ウ. 6月18日の巡回調査における発生圃場率は、27.0%で、平年(0.8%)より多かった。
- エ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年並または高く、本虫の増殖をやや助長する条件である。

防除上の参考事項

- ア. 平成24年度植物防疫情報第3号参照。

(4) ナシヒメシンクイ(第3世代幼虫)

予報内容

発生量 並

予報の根拠

- ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺数は44頭で、平年(19.7頭)よりやや多かった。
- イ. 6月18日の巡回調査における新梢被害の発生圃場率は10.8%で、平年(21.2%)より低かった。
- ウ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年並または高く、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(5) ハダニ類

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

- ア. 6月18日の巡回調査における被害発生圃場率は40.5%で、平年(12.5%)より多かったが、発生程度は軽微であった。
- イ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年並または高く、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(ブドウ)

(1) 晩腐病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

- ア. 6月の降水量は全般的に平年並であったことから、幼果の感染も平年並と考えられる。
- イ. 6月22日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は平年並または高く、降水量は平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

(2) ベと病

予報内容

発生時期 遅
発生量 やや少

予報の根拠

- ア. 県予察圃場（ネオマスカット）における初発生は6月25日で平年（6月6日）より遅かった。
- イ. 6月18日の巡回調査において発生圃場率は0%で、平年（15.2%）より低かった。
- ウ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並または高く、降水量は平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

- ア. 梅雨時期の連続降雨により急に病勢が進展する可能性があるので注意する。
- イ. ブドウべと病に登録のあるストロビルリン系及び作用点が同一の殺菌剤（アゾキシストロビン剤、クレソキシムメチル剤、ファモキサドン剤）に対して感受性が低下した耐性菌と思われる菌が本県の一部で確認されている。本系統の殺菌剤の使用は1作期1回とし、他系統の殺菌剤とできるだけ組み合わせる（平成24年度植物防疫情報第2号参照）。

(3) うどんこ病

予報内容

発生時期 やや遅
発生量 並

予報の根拠

- ア. 6月18日の巡回調査において、トンネル被覆栽培での発生を認めていない。
- イ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並または高く、降水量は平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

(4) フタテンヒメヨコバイ（第2世代幼虫）

予報内容

発生時期 遅
発生量 やや少

予報の根拠

- ア. 6月18日の巡回調査において発生は認められず、平年（2.0%）より低かった。
- イ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並または高く、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(5) チャノコカクモンハマキ（第2世代幼虫）

予報内容

発生時期 やや遅
発生量 並

予報の根拠

- ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺は認められず、平年（3.7頭）並に少なかった。
- イ. 6月18日の巡回調査において平年同様発生を認めなかった。
- ウ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並または高く、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(果樹共通)

(1) カメムシ類（チャバネアオカメムシ）

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における6月1～5半旬のチャバネアオカメムシの誘殺数は、239頭で平年（80.7頭）よりやや多かった。

イ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並または高く、夜温が高いと本虫の飛来に好適な条件である。

3. 野菜

（キュウリ）

（1）べと病

予報内容

発生量 少

予報の根拠

ア. 県予察圃場（5月10日播種）において、発病葉率は0.3%で平年（12.1%）より低かった。

イ. 6月22～25日の巡回調査によると、発生圃場率は33.5%で平年（49.2%）よりやや低かった。

ウ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並または高く、降水量は平年並とされており、発病をやや抑制する条件である。

（2）うどんこ病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 県予察圃場（5月10日播種）において、発病葉率は0.2%で平年（2.9%）より低かった。

イ. 6月22～25日の巡回調査によると、発生圃場率は46.7%で平年（42.7%）並であった。

ウ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並または高く、降水量は平年並とされており、発病をやや抑制する条件である。

（3）褐斑病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 県予察圃場（5月10日播種）において、発病葉率は0%で平年（0.8%）より低かった。

イ. 6月22～25日の巡回調査によると、発生圃場率は6.7%で平年（26.7%）より低かった。

ウ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並または高く、降水量は平年並とされており、発病をやや助長する条件である。

（4）炭疽病

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 県予察圃場（5月9日播種）において、発病葉率は0%で平年（0.1%）並であった。

イ. 6月22～25日の巡回調査では発生を認めず、平年（7.0%）より低かった。

ウ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並または高く、降水量は平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

（キュウリ、ナス）

（1）ミナミキイロアザミウマ

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月22～25日の巡回調査によると、露地、施設栽培のナス及びキュウリでの発生量は平年並であった。

イ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並とされており、発生をやや助長する条件である。

(トマト)

(1) 疫病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 県予察圃場（5月9日定植）において、発病葉率は0%で平年（0.9%）より低かった。

イ. 6月22～25日の巡回調査によると、発生圃場率は9.1%で平年（1.3%）より高かった。

ウ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並または高く、降水量は平年並とされており、発病をやや抑制する条件である。

(2) 葉かび病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 県予察圃場（5月9日定植）において、発病葉率は0%で平年（0.2%）より低かった。

イ. 6月22～25日の巡回調査によると、発生圃場率は9.1%で平年（25.8%）より低かった。

ウ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並または高く、降水量は平年並とされており、発病をやや助長する条件である。

防除上の参考事項

ア. 本病の初発生時期（雨除け栽培トマトでは6月下旬～7月上旬）と病勢進展時期（7月下旬～8月上旬）に効果の高い殺菌剤を予防散布する防除体系は、葉かび病の防除に有効である。

イ. 一部地域で*Cf-9*を持つ抵抗性品種を侵すレースが確認されているので、発生を認めた場合には速やかに防除対策をとる（平成22年度植物防疫情報第4号参照）。

ウ. 本県では、トマト葉かび病に類似した病徴を示すトマトすすかび病の発生が認められている（平成18年度病害虫発生予察特殊報第2号参照）。肉眼ではこれら病害の判別は困難であるが、顕微鏡下で観察すれば、トマトすすかび病菌の分生子が細長い形状であることから葉かび病とは容易に区別できる。

(アブラナ科野菜)

(1) ダイコン軟腐病

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並または高く、降水量は平年並とされており、発病をやや助長する条件である。

(2) キスジノミハムシ

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の降水量は平年並とされており、特に発生を助長する条件ではない。

(3) コナガ

予報内容

発生量 少

予報の根拠

ア. 6月1～5半旬の県予察圃場（赤磐市）におけるフェロモントラップへの誘殺数は0頭で、平年（47.3頭）より少なかった。

イ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並とされており、発生をやや抑制する条件である。

(野菜共通)

(1) ハスモンヨトウ

予報内容

発生時期 並

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月1～5半旬の県予察圃場（赤磐市）のフェロモントラップの誘殺数は36頭で、平年（62.4頭）より少なかった。

イ. 6月22～25日の巡回調査によると、ナス、トマト、キュウリでの発生は認められず、発生圃場率は平年（0%）並であった。

ウ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並とされており、発生をやや助長する条件である。

(2) アブラムシ類とアブラムシ伝搬性のモザイク病

予報内容

発生量 アブラムシ類 並

モザイク病 並

予報の根拠

ア. 6月1～5半旬の県予察圃場（赤磐市）の黄色水盤への飛来数は287頭で、平年（294.7頭）並であった。

イ. 県予察圃場（赤磐市）における6月下旬のキュウリ、トマトでのアブラムシ類の発生量は平年並であった。モザイク病は、平年同様発生を認めなかった。

ウ. 6月22～25日の巡回調査によると、キュウリ、トマトのアブラムシ類の発生量は平年並であった。モザイク病の発生圃場率は、キュウリでは0%で平年（1.8%）より低く、トマトでは18.2%で平年（6.9%）より高かった。

エ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並とされており、発生をやや助長する条件である。

防除上の参考事項

ア. モザイク病の発病株は伝染源になるので早めに除去し、アブラムシ類の防除を行う。

4. 花き

(キク)

(1) 白さび病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月22～25日の巡回調査によると、発生圃場率量は13.3%で平年（28.6%）より低かった。

イ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並または

高く、降水量は平年並とされており、発病をやや抑制する条件である。

(2) ハダニ類

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月22～25日の巡回調査では発生を認めず、発生圃場率は平年（18.3%）より低かった。

イ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並とされており、発生をやや助長する条件である。

(3) アブラムシ類

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月1～5半旬の県予察圃場（赤磐市）の黄色水盤への飛来数は287頭で、平年（294.7頭）並であった。

イ. 6月22～25日の巡回調査では発生を認めず、発生圃場率は平年（15.5%）より低かった。

ウ. 6月22日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並とされており、発生をやや助長する条件である。

この情報は、岡山県病害虫防除所ホームページでも公開しています。アドレスは、
http://www.pref.okayama.jp/soshiki/kakuka.html?sec_sec1=239 です。